

演題番号：C7

リンパ腫の寛解後に眼内のみに再発を認めた犬の1例

○近藤 仁

こんどう動物病院

1. はじめに：犬においてリンパ腫は腫瘍全体の24%と言われており、最も一般的なタイプは多中心型リンパ腫であり、リンパ腫全体の80%を占め、眼内への浸潤は広く知られているものの、そのほとんどはB細胞性かT細胞性であり、非B非T細胞性リンパ腫の報告は少ない。今回、当院において非B・非T細胞性眼内リンパ腫を発症した症例を経験したのでその経過について検討した。

2. 材料および方法：10歳、柴犬、去勢オス、ワクチン・フィラリア予防歴あり、既往歴は慢性リンパ球性白血病疑い(これについてはCHOPベースの併用化学療法を実施し寛解した)。突然の左眼の羞明を主訴に来院。前房内に出血を伴うぶどう膜炎を確認。ジフルプレドナード点眼、プレドニゾン内服を開始。その2日後より緑内障に発症しコントロールが難しくなったことと、既往歴からリンパ腫による二次的な病態を強く疑ったが、全身のリンパ節の腫脹や消化器症状、ならびに血液検査、画像診断において異常所見が認められなかったことから、確定診断と根治を目的に、眼球摘出かシリコンボールインプラント眼内挿入術の際のぶどう膜の病理組織学的検査を提案したところ、後者を選択されたので実施した。

3. 結果：病理組織検査ではぶどう膜組織のほぼ全体に及ぶ異形成の高い多数の核分裂像を伴う円形細胞のシート状増殖を認めた。免疫染色においてCD3陰性、CD20陰性であったことから、非B非T細胞性リンパ腫と診断された。その後ロムスチンにて管理をしたものの反対眼も同様に症状が進行してきて最終的に両目の視覚喪失となり確定診断から4か月後に死亡した。

4. 考察および結語：本症例は、今回の発症の1年3か月前に骨髓生検をしていないので確定診断が出来ていないものの、血液塗抹所見および臨床経過から慢性リンパ球性白血病が考えられた。今回の発症の際には全身のリンパ節の腫脹や消化器症状、ならびに血液検査、画像診断において異常所見は認められなかったことから当初は眼球のみに原発した節外型リンパ腫と考えたが、その後対側眼にも同様の症状が出たことから昨年病態がリンパ腫に移行した可能性が高いと推察される。